

コンピュータから学んだこと

教育学部 豊村 洋子

私がコンピュータらしきものに触れだしたのは、学問的要求というよりは、むしろミー・ハー的興味関心と実用主義から始まっています。ミー・ハー気分からは、なかなか抜けきれず、いまだに、ただ、面白いということだけでキカイをいじっている観があります。前任校（北教大）ではデータの整理さえしておけば、教育工学センターの教官が計算してくださったので、その講習会などにも出たりしましたが、切実さがないので、知識は頭の中を素通りし殆ど覚えていません。ですから、私には、2年半ほど前の金大でのなれそめが、実質的にもコンピュータとのそもそものなれそめといえます。

きっかけは、学会発表に向けてのアンケート集計と、地区学会の会報創刊号作成を受け持つことになったことで、「自分の手塩に掛けて」作り上げたいとの希望が、両方共に計算機センター（現情報処理センター）により叶うことができました。先ず、ウチの学部の金子先生にSASの手ほどきを受け、センター計画の講習も受け、図表作成には「会報作り」に全面的にお世話になった工学部・中野（康）先生からも沢山教えていただきました。会報は、金大が開発した日本語ソフトウェアシステムを利用しましたが、生まれて初めての「かな」や漢字が画面に現れる機械操作でしたから、目を回しながらも、とにかく面白さが先行し夜な夜なセンターを訪れては徹夜作業に近い学生さん達に混ってやりました。皆さんが親切なのを頼りに、解らないことはとにかく隣に座る学生さんや教官、職員の方々に根掘り葉掘り聞いたり頼んだり、厚顔無知を地でいくような生活でしたが楽しい日々でした。

とにかくこの作業を通じて機械ばかりではなく、社会勉強にもなり、専攻の教育法にもひき寄せて得るところがありました。時間が経つほどに小さな冊子ながら、あらゆる技術が殆ど網羅されていることに気づかせられ、銘ずるところ大きなものがあります。オバンでもこんなに面白いのに子供達がファミコンとかに夢中になるのは当り前のような気がします。

コンピュータ操作の原理は、頭脳の整理・発想の転換などにも応用できそうです。わけても、ディレクトリ作成やDeleteの実行は、思考の方法論としても記憶の飛躍的發展に役立ちそうに思えました。

キカイに接していると、こういうソフトなり、ハードなりの利用法を編み出す人間の頭脳の凄さに感心させられます。マルクスが、「資本論」の「剰余価値学説史」篇で、機械の本質的構成部分について述べていることが納得できる思いです。マルクス経済学は、破綻したとか、干からびて墓場行き等々の言が大勢を占めているようですが、科学の発達と社会発展の人的絆における統一を考えると、彼の方法論はますます光彩を放っているように思えます。彼は人智が創り出したあらゆるものから学び、先人の業績の批判的摂取と克服をうたい、一貫して最も忠実に実行しているといえます。新しいものを知るほどに、古典的文献をしっかりと読むことの意義を痛感させられるこの頃です。